

# 信州読書会 ツイキャス読書会

## 課題図書 太宰治 『皮膚と心』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

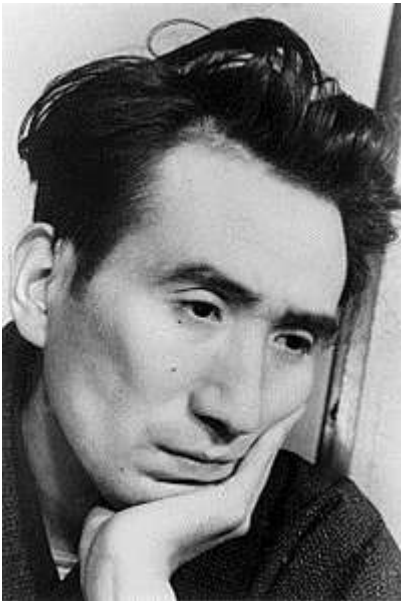
『信州読書会』メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 112 回のツイキャス読書会の課題図書は、太宰治の『皮膚と心』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

## 皮膚と心を読んで。

20代の女性が主人公の話。

自分の器量に、自信なくコンプレックスをもっている。

ある日に突然に、胸に吹き出物が現れるてまう。

お風呂で、擦り取ろうとするが広がる一方。

作品中、女性の皮膚への大切さが描かれ。

この旦那さんは、さりげなく気を使う。

それに対して、女性も小さく気を使う？

最後は、病院に行く。

順番待ちの時、二人の間に流れている空気を

アレルギーの注射だけで

夫婦になっていく。

題名から考えました。

皮膚とは、人の内側と外側を

分ける器官。その境界に吹き出物ができて、広がり破れる。

自分は、内側と外側の区別がなくなる。

それは、大きな不安を生むだろうな？特に女性の場合、わたしの幻想ですが。

女性は、心の中に宝物がねむっていて、それを大事に大切に綺麗に包んでおきたいのでは？

吹き出物は、なんの象徴だろう。

仲良くね。と、天からの贈り物？或いは、変な虫がついた？

吹き出物について、想像するのが楽しかったです。

(おわり)

## どっちを選ぶでショー！

本作を読み、

- ・ある朝起きて突然虫になるか？あるいは徐々に身体中に吹き出物ができるのがいいか？や、
- ・他人が怖いなら自分より弱い人をマウンティングするか？または自分を卑下しピエロになったり、自分は仕合わせになっただけでいいか？

などと

- ・食べるならう●こ味のカレーか？カレー味のう●こか？

とどちらも選びたくない二者択一のテレビ番組に自分が出ている想像をした。

作中に出てくる女性のように、自分は何も悪いことをしていないのに、なんで神様は私にだけこんなひどい仕打ちをするのか？ と思った経験がある方は私含めて多いのではないかと。何か物を失くした、病気や障害、貧困、人間関係、自然災害、テロや紛争、差別や弾圧など。

一神教で言われているような原罪だとか、仏教の生老病死だとか、信仰を特に持たない私は日常の中で忘れていた時間が長い事にも気付かされた。

生きているだけで辛く苦しく罪な事なんて言われたらそこから背を向けたくなるけれど、それを胸の片隅に置いて、それ以上に生きていて良かった、地球に生まれて良かったー！と思える自分でいたいです。

それにしても何故人は生存競争以外で自分の見た目を気にしますかね？我が細君に至っては、子供にせがまれ仕方なく見たくもない結婚式のビデオを見て「あの時は肌が綺麗だったなあ。エステでも行こうかしら」なんて言っております。

どうぞご自由に、と申しました。

(おわり)

## 『乙女の肌』

女性にとって皮膚、肌はとても大切でどんな小さな傷や吹出物に対しても敏感なんだと思います。

他人から見ると取るに足らないようなモノでも、あらゆる想像力を発揮してしまうものなのではないかなと思いました。

私も以前に顔の左端に、タピオカミルクティーを側面から覗いたような黒いブツブツした吹出物が突然出てきてしまって、これはただ事ではない！と思い皮膚科に慌てて行きました。

それは、ただのニキビでした。

30代を過ぎていたので、先生に若者が出来るニキビだと言われて少し嬉しいような複雑な感じでした。

お薬を貰って何日間か塗っているとすぐに何事も無かったように治りました。

それから、今度は足の指に小さい水泡のようなブツブツができました。

今度こそ、これは絶対に水虫ではないか！と少しショックを受けながらも、放置しておけないので病院に行きました。

水虫と聞くと最近はそうではないということを知りましたが、おじさんがなるような気がして恥ずかしいし、すごくショックでした。

でも、それは水虫ではなくてただの汗疹でした。

サンダルの指に掛かる所が通気性の悪い素材だったので汗をかいて蒸れたみたいでした。

そういえば、私汗かきだったわ！ と思い返してみても納得しました。それも薬を塗っていたらすぐに治りました。

他にもまだあるのですが、それはまたの機会にしますが、女性はそういうトラブルが多いのではないかな？ と思いました。

主人公の私という女性も、自分に自信がないような感じですが、肌には自信があったのではないかなと思いました。

私も今はそうでも無いですが、若い頃は肌だけは少し自信がありました。キメが細かくて、肌だけは誉められていたので私という女性もそうなのかな？ と思いました。

自分の唯一自信の持てる所が吹出物が出て、醜くなるのは本当に耐えられない気持ちでいっぱいだったのではないかなと思いました。

それだけでなく思い込みが激しそうな性格だから最悪のシナリオが彼女の中で出来上がっていたのかもしれない。

そういえば、今の私は前ほど大袈裟に皮膚科の先生に訴えかける事も無くなったなと思いました。

(おわり)

## 『皮膚と心』 感想文

一読後、私は「皮膚と心」を『「私の皮膚」と「あの人の心」』ということで感想文を書こうと思いました。

我ながら、大分、冒険をしていると思っています。

「皮膚」は「あの人の心」を映す鏡かなとも思いました。

「吹出物」は現実のものというだけでなく、メタファーとしても使われていそうな気がしました。

「吹出物」は「私」の心の闇を表象しているように思えました。

結婚三か月後に発症したのは、その三か月間のうちに「私」の心の中に言葉にまで成長しないが、しかし確固たる不満や鬱屈が爆発寸前にまで、大きくなってきたのではないかと思いました。

心の中の「満たされない気分」は、心の外からの治療である「タオルできゅっきゅっと皮のすりむけるほどこする」とか、「チュウブにはいった薬を私のからだに塗る」とかで治る種類のものではなかったと思います。

特効薬は「私」に対して「胸を熱くしてくれる」、「あの人」の心が十分に「私」に届くことだと思いました。

「一人称独白体」のこの作品は「私」の意識の流れを見事に表現していると思いました。

太宰治独特の「女性一人称独白体」によって「私」の意識が「あの人」を否定したり肯定したり、目まぐるしく変化するの  
が面白かった。

また、「私」の意識が「あの人」の過去の女性に向かったり、「愛の落とし穴」に落ちたボヴァリイ夫人を思ったり、果ては「売春婦」にまで及ぶ展開に異状性が感じられて、一種異様でした。

「どん底」とか「愚鈍な白痴」とかいう言葉が使われているので、「人間失格」ならぬ、「女性失格妻」かな、などとも思いました。

結局、「中毒」であることが分かり、注射で一件落着、病院の外は二人に心のように晴れていたようです。

注射器の中には「あの人の心」が入っていたように思いました。

「犬も食わぬ夫婦……」のようで、読み終わって一人取り残された感じがしました。

(おわり)

## 『 泥沼と悪魔 』

十年くらい前、赤い湿疹がぷつぷつと私の肘の内側にできた。単純にあせもだとほっておいたら、すぐに全身に広がって、痒くなった。慌てて、病院に行ったら、医師は私をひとめ見て「ジベル薔薇色糝糠疹(ひこうしん)」とさらさらと病名を告げた。私は痒みより、一度では覚えられないその病名に気を取られた。「薔薇色っていいな」となぜか感傷的な気分になった。「たぶんストレスなので、ゆっくり休んでください」と診断されたが、病名が判明した時点で、もう治ったような気がしていた。女性って、皮膚病になると、不思議と感傷的な気分になるのかとこの小説を読んで、自身のことを思い出した。たぶん、皮膚って女性にとって、女性が思う以上に大切なものなのだろう。

この小説の主人公の「私」も、自分のことを「おたふく」や「おばあちゃん」といい、自信がない態を装っていたが、実際に吹出物に占領されてしまうと、心の奥に潜んでいた皮膚に対するプライドに気がつく。「私」が自負していた謙譲やつつましさ、忍従は吹出物の前には賈物だったと気付いてしまう。それだけ、「皮膚」って心と繋がっていて、繊細なものだとこの小説のタイトルも教えてくれる。

( 引用始め )

言えない秘密をもって居ります。だって、それは女の「生まれつき」ですもの。泥沼を、きつと一つずつ持って居ります。それははっきり言えるのです。だって、女には一日一日が全部ですもの。男とちがう。死後も考えない。思索もない。一刻一刻の、美しさの完成だけを願って居ります。生活を、生活の感触を、溺愛いたします。女が、お茶碗や、きれいな柄の着物を愛するのは、それだけが、ほんとうの生き甲斐だからでございます。

( 新潮文庫 P.115 )

( 引用終わり )

女性は、「泥沼」を持ちながらも、美しい物も溺愛する。だからこそ、貧相な夫であっても有名な化粧品店の蔓バラ模様の商標を考案したという事実は、皮膚の下に隠れている「私」のプライドをいつも刺激してくれる。

だが、女性の不埒と浮遊からなる「悪魔」の存在にも気付いている。でも、それは普段はすべて「皮膚」の下なのだ。「泥沼」も「悪魔」も「プライド」もだ。

それを覆い隠せていた「皮膚」に吹出物ができると、隠せていたものが顔を覗かせてきた。だが、夫による思いやりで、危うく完全な浮上を免れた。病院の帰りにはすっかり治ってしまう。女性の皮膚＝心を守るのは、やはり愛なのか。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。<http://ameblo.jp/kaoru8913/> スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

## 『皮膚と叡智』

(引用はじめ)

知覚、感触が、どんなに鋭敏だっても、それは動物的なものなのだ、ちっとも叡智と関係ない。全く、愚鈍な白痴でしか無いのだ、とはっきり自身を知りました。

(引用おわり)

私もこの冬、両太ももの外側に発疹ができて、メンソレータムを塗っていたら、どんどん発疹の領域が拡大して股間まで到達しかけて焦った。結局、風呂上がりに顔に塗っている保湿ローションを代わりに塗ったら、一発で治った。

学生の頃教習所に通っていてペルペスでダウンしたことあることを皮切りに、ストレスによって肌に異変が起こることがよくあった。20代はずっと左の頬にステロイドを塗っていた。心は皮膚に表れる。

如来は悟りを開いた仏だが、菩薩は仏の悟りを求め者だ。菩薩は、着飾っている。悟りを得て、着飾ることをやめるとき、如来になっていく。着飾ることが内面の表現だとすれば、悟りは、宇宙の外側にある叡智の表現だ。この差は大きい。知覚や感触は、動物的で、叡智は、仏のものだ。動物は、宇宙の外側に関わる形而上学に無縁である。

この語り手の女は、悟りを求めている。だが、プライドを捨てられない。肌の美しさがプライドなのは、菩薩の段階だ。この煮え切らない亭主を一筋に信じられれば、大宇宙の真理である「叡智」に近づけるのかもしれない。だが、吹出物くらいで、信じられなくなっていく、か弱い心のうごきが、饒舌に描かれている。

如来は袈裟をまとっているだけなのは、悟りを得て、叡智を信じているからだ。

この女房が、吹出物くらいで、簡単に鬼になってしまったり、わあわあ騒いだりするのは、生悟りだからであり、ストレス程度で、発疹が出てくのも生悟りゆえだ。

化粧品会社のデザインの仕事を「ふざけちゃいけねえ、職人仕事じゃねえか、よ」と自嘲するこの亭主は、大宇宙の叡智に関わる芸術的創作をしたくて、煮え切らない暮らしをしていたのかもしれない。その上、性病をうつされたと妻に疑われてはたまらない。しかし、疑われるだけの、亭主の生悟りも、やっぱり吹出物の原因のひとつなのか。そうだろう。似た者夫婦なのだ。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)